

波動

1996. 2. 8 坂本浩司

物質科学の発達めざましいものがあるが、昔から宇宙はどうして出来たか、エネルギーの創生は、生命や靈魂は、時間や空間はとなると何ひとつ解けていないのが現実である。その原因はただひとつ、現象は粒子性と波動性の二つから成り立っているのに、波動性を見落としていたからである。粒子性は姿・形を表し、波動性はものの性質、機能を表している。また波動性は物の形を作る原動力でもある。エネルギーも力学的以外のエネルギーは波動的エネルギーに集約できる。即ち、電磁波（電波・熱波・光波・紫外線・X線・ガンマ線はいずれも電磁波）、重力（電磁波の変成エネルギー）はいずれも波動的エネルギーである。

”現象は波動的エネルギーによって表現される”

大橋正雄著「新波動性科学入門」

門」

ここでMRA（磁気共鳴波動分析器）によって再び注目を集めるであろうホメオパシーについて調べてみよう。

ホメオパシーは、サムエル・クリスチャン・ハーネマンの著作『医学概論』が出版された1810年に公式に成立したとされている。ハーネマンは1755年に生まれ、1843年に没したドイツ人医師である。ライプツィヒやウィーンで医学を修め、1779年に医師になった。巡回医師として働いた彼は自分が学んだ治療法に疑問を抱くようになった。特に投薬の方法について疑問だらけで、自分の患者に薬を使わず、運動、正しい食事、新鮮な空気の必要性を説いた。

当時の正統的医学について

1780年頃から1850年にかけての約70年間は、無謀で荒々しい治療が盛んだったために「英雄医学の時代」として知られている。英雄治療の得意技は瀉血であった。瀉血は様々な方法で行われたが、最も一般的で効果をあげたのは刺絡（ランセットで静脈を切る方法）であった。一度の施術で約500mlも出血させるのは普通のことと、ときにはもっと大量に、しかも繰り返し出血させることもあった。

1700年代後半の正統的医学は女人禁制の大学で教えられ、極端な男性優位主義、エリート主義が横行する世界だった。エディンバラ大学には当時有数の医学校があったが、その物理学教授、ウィリアム・カレンは英雄医学の理論的指導者のひとりだった。カレンは疾病一元論者だった。あらゆる症状は一つの原因、つまり、悪い血液から生じている。したがって、治療法はその血液を取り除けばいいという考え方である。

アメリカにおけるカレンの後継者は、独立宣言の署名者のひとり英雄医学の花形、ベンジャミン・ラッシュだった。彼は口癖のようにこのように言っていたという「息があり手が動くかぎりはやるぞ。瀉血をやめるぐらいならランセットを握ったまま死んだほうがましだ」

瀉血は、からだから不純物や毒物を排出させることを狙いとした瀉下法（甘汞、

塩化第一水銀）や催吐法（吐酒石、毒性のアヘン塩）や發汗法や摩擦、やけどを利用して皮膚刺激を与え水疱をつくらせたり、吸角療法（熱した吸い玉コップを利用）と併用された。

ホメオパシーの三つの法則

類似の法則

ウィリアム・カスはキナの木の花の皮が苦くて収斂性があるから健胃剤として効果があるのだと考えた。ハーネマンはそれを確かめるために、キナの花の皮よりも苦くて収斂性の強い薬を調合し、その薬がマラリアの間歇熱に対して無効であることを証明した。次に健康状態のいいときに自分でキナの花の皮を服用し、熱が出ることを確認した。^{*3}。

この経験は、後に行われた様々な物質による多くの実験に裏打ちされ、そこから『類似の法則』という、新しい理論の最初の部分が生まれることになった。要するに「類は類を治す」という考え方だ。

「健康者に特定の症状を起こす物質には、それと類似した症状を呈する病者を治す効果がある」。ハーネマンはこの『類似の法則』に基づいた治療法を、「その病気に似たもの」を意味するギリシャ語から造語して「ホメオパシー」と名付けた。症状の対立物を使って治療する似て非なる治療法を、ハーネマンは「アンティパシー」と呼んだ。熱にアスピリン、高血圧の治療に降圧剤を用いるなどはアンティパシー医学の好例である。ハーネマンは同時代の医師が一般に行っていた英雄医学に対しても別の造語で呼んだ。「その病気とは別のもの」を意味するギリシャ語から「アロパシー」と名付けた。英雄医学は症状に対する一貫した理論性を欠く薬を処方していると考えたからだ。

アロパシーの意味

ギリシャ語で $\alpha\lambda\omicron\sigma\iota\varsigma$ が定義した「その病気とは別のもの」を意味する

もう一つはドイツ語を語源とするもので「全治療」を意味する

これはつまり疾病の治療において、効果が証明されたあらゆる方法を包括する治療法としてアロパシーを定義つけた。この修正主義的な定義はその名称では不利とみたアロパシー医が、より好感を与える意味付けをしようとして1800年代に案出したものである。

無限小の法則

「類似の法則」に従って治療にあたりはじめたハーネマンは薬理効果に二相性があることに気づいた。一連の初期症状の後にその反対の症状があらわれる事が多いのだ。たとえば、アヘンは初期症状として多幸感や興奮を呈するが、やがて

^{*3} 村皮

「ペルー人の皮」または「ジャシイットの皮」としても知られる村の木の皮はコーヒー科に属する南米の熱帯雨林の樹木からとれる。キネの原材料で、南米のインディオが高熱、特にマラリアの熱をさますために使っていたもの。1600年代半ばに、スペイン人の医師やジャシイット派の僧がリマで村の木の皮を使いはじめ、その治療成績が良かったために、マラリアが流行していた当時のヨーロッパの需要を大いに喚起する事になった。村の木の皮はマラリアの治療に効果をあげた最初の薬であったと同時に、西洋医学に最初に導入された【特効薬】であった。

抑鬱状態を引き起こす。ハーネマンはその二相性を作用と反作用のひとつだと解釈した。初期症状は薬の直接的作用、遅延症状は均衡を回復しようとして身体側が起こす反作用だと考えたわけである。おそらくホメオパシー療法は、病気に抵抗する身体の反応を引き出すことによって効果をあげているのかもしれない。というのは類似薬を与えるとその直後に症状が悪化し、次に好転する事がしばしばあるからだ。（瞑眩？）ハーネマンはその初期効果を弱めることを考え、投与量を減らしてみた。ところが意外なことに効果は以前にもまして強くなった。その宗教的信念のゆえに、物質的な現実感よりも宗教的な現実感を重視していたハーネマンは、その考え方を治療にも応用し、薬のもつ物質的な実体よりもその超自然的な本質を重視するようになった。そのような考え方は、自ら行った実験結果と相俟って『無限小の法則』として知られているホメオパシーの第二法則を生み出すに至った。この法則は、正しく希釈されれば投与量は少なければ少ないほど、病気に抵抗する身体の生命力をそれだけ効果的に引き出すことになるとするものである。⁴この希釈剤で治療するにあたってハーネマンは一つの法則を定めた。単味の法則である。医師はホメオパシーの調剤を一度に一種類しか使ってはならない、患者がどうなるかを見届けてから次の行動を起こせ、決して同時に二つ以上を用いてはならない、と定めた法則だ。

慢性病の法則

開業してから20年近くたって、彼は自分の治療法の理論的な枠組みに第三の法則をつけ加えた。それは『慢性病の法則』とよばれ、最初の二大法則が必ずしも常に有効ではないことの理由を説明するためのものだった。ホメオパシーの治療で急性症状がよくなっても、いずれ同じ症状が再発するか、あるいは別の愁訴となってあらわれるケースが多いことに気づいていた。

「慢性病の法則」とは、治療しても治らないのは、以前に受けたアロパシー医学の治療によって身体の奥に生じた何らかの障害が原因になっているからだとするものである。その障害（ルネマンは「毒」と呼んだ）には乾癬、梅毒、淋病などが挙げられる。ハーネマンは皮膚のあらゆる掻痒・炎症症状を乾癬と称していた。それらの症状が体表に留まっている限り、不快であることを除けば別に問題はないが、アロパシー医学がそれを抑えつけて身体の奥に追いつめると、それが何年かたって糖尿病・がん・リウマチ・精神分裂病といった多様な病気となってあらわれる。したがって、ホメオパシーでその障害を治療するには、まず、背景となっている慢性病の治療を先にしなければならないということになる。「慢性病の法則」

は、ハーネマンの後継者たちのあいだに大きな論争を呼び起こし、三大法則の中では最も問題の多いものだった。今日のホメオパシー医は「慢性病の法則」を認めて治療に応用しているが、淋病や梅毒のような特異的な感染症との因果関係は

⁴ルネマンの希釈方法

薬草の絞り汁1に対して87%のアルコールと蒸留水を9の割合で混ぜる次に、その溶液の入ったビンを皮製のバットに100回、激しくぶつけながら振盪する。彼は振盪が薬の治療効果を高めると信じていた。「ホメオパシーのダイナミゼーションとは、それによって原材料においては潜伏していた薬の治療効果が誘導され、生命力に対して超自然的に働きかけることを可能とさせる処理工程である」第一段階で出来る薬は、ホメオパシーの略語で「1X希釈」（10分の一希釈液）。その希釈液をさらに10分の一に薄めて100回振盪すると「2X希釈」

認めていない。

ハーネマンが新しい治療法を世間に発表した当時、ホメオパシーの成功率はおおむね失敗率をはるかに凌ぐものであった。アロパシー医学を捨てる医師がヨーロッパ中に増え始めた。1843年に88才でこの世を去ったとき、ハーネマンは押しも押されぬ名医で、一代で築き上げた異端医学は、西洋世界に確固たる地位を占めるかと思われるほどの勢いであった。

次に簡単にホメオパシーの盛衰をまとめてみた

今からたった150年前のアメリカにこれほどのホメオパシーの全盛時代があり、またあっという間に消えてしまったことに驚きを感じてしまう。

アメリカにおけるホメオパシーの盛衰の歴史

- 1828年 ホメオパシー医が初めてアメリカに渡る
- 1836年 ハーネマン医科大学がフィラデルフィアに創設
- 1840年 ハーネマンの著作が英語に翻訳
- 1842年 ホメオパシー治療非難の宣伝活動
- 1844年 アメリカ・ホメオパシー協会設立
- 1840年代末 コレラがアメリカ中西部に流行。アロパシーよりホメオパシーの治療で助かった事も特質される
- 1846年 アメリカ医師会（A M A）設立（アロパシー医の政治圧力団体）
- 1850年 ホメオパシー医学校 クリーブランドに建設

順調にホメオパシー医学がアメリカにおいて発展した理由はその当時「ホピュラーヘルス運動」*1 が大きな政治運動を形成しつつあり、それらの人たちの英雄医学に対する批判がホメオパシー医学と結びついたところによるものであるといえる。一般の医学史では、「ホピュラーヘルス運動」をアメリカ医学の暗黒時代として描いているが、実は、健康ということに関して大きな実験が行われていた時代で、「誰もが自分の主治医だ」というスローガンに要約されているように、自己管理を求める民衆の声であった。

- 1855年 A M A 全州の医師会にホメオパシー医の除名要求
- 1860年代 ホメオパシー医との共同診察をしたアロパシー医を告訴
 ホメオパシー医の施術を認めた病院をボイコット
 南北戦争時の軍隊の衛生班にホメオパシー医の入隊妨害
- 1868年 女性医師の入会拒否
- 1870年 有色人種を会員にもつ医師会からの代表権拒否
 マサチューセッツ医師会の入会拒否（ホメオパシー医を除名しなかったため）

*1英雄医学の療法を批判して、医師免許法の撤廃を目標として、いかなる治療法であれ本人が有効だと認めるものについては施術の資格を与えるべきだと訴えた。

1871年 ホメオパシー医が働いている保健局で診療にあたった医師の入会を拒否^{＊1}
1878年 ホメオパシー医の妻と診療にあたったコネカットの医師が郡の医師会除名

団結したアロパシー医学界の功利的なふるまいは瞬く間に目的を達成し、ホメオパシー医たちは制度の締め付けによってその地位と重要性を失った。その原因として考えられる要因の一つは、ホム・ブーラー・ヘル運動を支えていた政治連合体が分解したこと、もう一つはアロパシー医たちが、そもそもの混乱のもとであった英雄的療法を捨て始めたことであった。

1860年代から瀉血と甘汞をやめ麻酔薬とアルコールを使うようになった。

1880年 ホメオパシー医学会が二つに分裂（ハーネマン派と多数派）

1890年代 多数派はアロパシー医学に転向 A M A に吸収

1900年 全米に15000人以上のホメオパシー医 医学校22校

1923年 医学校わずかに2校

1950年頃 殆どのホメオパシー医が姿を消す

1828年にアメリカに渡ったハーネマンのホメオパシーは僅か1世紀の間、英雄治療に警鐘ををならしただけでアメリカから姿を消してしまった。しかしホメオパシーは西ヨーロッパ諸国の大半でも科学的医学に駆逐されたが第三世界諸国に残った。インドは現代のホメオパシーの中心地で、医師の数も世界最大をほこり、ハーネマンの著作の大部分を英語版で出しているのはインドの出版社だけである。現在イギリス、フランス、ドイツ、ギリシャ、東ヨーロッパの数カ国スリランカ等でホメオパシーが行われている。

何故ホメオパシーは効果があるのか？

ホメオパシー薬が治療家たちの信じているような効き方をするとすれば、そこにはどのような可能性が考えられるだろうか。類似の法則を認めるのは困難なことではない。他の治療理論に劣らないほどの根拠はあるし、限定つきだが、正統的医学でも使われている。たとえば、ワクチンは一種の同種療法だし、アレルギーの減感作療法もそうだ。現在、一般の医師が使っている特効薬で、もともとホメオパシー医によって持ち込まれたものもいくつかある。狭心症の疼痛緩和に対する標準的な治療薬としてのニトログリセリンは、アメリカ・ホメオパシーの父として知られるフィデルフィアのコンスタンティン・ヘリング博士（1800～1880年）によって伝えられた。アロパシー医学でニトログリセリンを使ったという記録がはじめてあらわれるのは1882年のことである。アロパシー医学はまた、1935年からR A の治療に金属の金を使いはじめたが、ホメオパシーではそれよりはるか以前から関節痛に金を処方していた。

一般の医師たちの喉元に引っかかり、効果の有無とはかかわりなく、科学派の批評家たちにナンセンスだとしてホメオパシーを一蹴させてきたのは無限小の法則だ。ハーネマンと同時代を生きたイタリア人化学・物理学者、アボガドロ伯爵（1776～1856年）の計算によれば、一モル濃度の溶液にはその分子が 6.0225×10^{23} になる。ホメオパシー医が希釈する薬は、モル濃度液そのものが、あるいは希釈を重ねていくと

^{＊1}「ニューヨークタイムズ」社説「ホメオパシー療法で治ることよりも旧式な療法で患者が死ぬことをよしとする信条ほど強固な信条が他に
あるのか」と論評している

軽くアホガドールの限界を超えてしまう。ホメオパシーに対する科学派の攻撃はここで嘲笑に変わる。

がしかし、ホメオパシー派は反論する。第一に多くのホメオパシー薬はアホガドールの限界内の濃度で使われている。第二に希釈度の高い物質に強い効力があるかも知れないという可能性を否定するだけの証拠を、正統的化学が出していない。

最近、植物・動物・人間の生理と行動に影響する特定の物質はきわめて低濃度でも強力に作用するという、有力な証拠がたくさん出てきた。甲状腺ホルモンは血漿の百億分の一 (10^{-10}) という濃度で血中に存在し、LSD (リゼルギン酸ジエチルアミド) はわずか数百分の一 g で意識に衝撃的に変化を起こすが、このときの体液中の分子濃度はきわめて低いものである。 10^{-9} のペニシリン希釈液でも、ある種のバクテリアの成長を阻止することが出来る。もっとも驚くべきはフェロモンである。空気中にいかに僅かな分子があればよいかを考えると、フェロモンはこれまで知られている最も強力な生物学的活性成分だといえるかもしれない。

しかし「高希釈液」と「超希釈液」は別物で 10^{-9} 希釈と 10^{-10} 希釈、ホメオパシーでいう 30X と 300X では大幅な差がある。前者には原成分の分子が相当数ふくまれ、その薬効はそれらの分子によるものと考えられる。後者はおそらく原成分の分子は残っていない。したがってそれが動物や人間の患者に効くとなれば、何らかの別の方法で効いているということになる。

第三の反論としてアホガドールの限界を超えた希釈液で生理学的な効果を認めた科学研究がいくつもある、ということだ。酵素反応に対する様々な希釈液の影響を 10^{-120} という低濃度までしらべ、塩化第二水銀が澱粉から糖への転換率に影響していることを 1933 年ににグレート⁵⁾ のペルッソンという研究者が発表した。また 1946 ~ 1952 年にかけてティンバラのウィリアム・ホイト⁶⁾ がペルッソンの研究の徹底的な追試を行い 10^{-61} まで確認した。残念なのはそれらの研究発表が、物理学者・化学者・アロパシーの医学者たちが読みそうもない専門誌になされた、ホメオパシー側の研究であった。

現代のホメオパシー研究家は、アホガドールの限界を超えて希釈された物質の生化学的・生理学的作用はいかなるメカニズムによるものかを、次のような見解で説明している。ハーネマン方式⁵⁾ によって希釈した溶液中にかつて存在していた物質の分子が何らかの方法で溶媒の分子構造に永久的な変化を与え、その結果、試薬の分子がなくなったあとも、その液体は未処理の液体とは別のものになるのではない。ふたつの液体のうち一方にはかつてそこを通過した物質による「刷り込み」があるというのである。その刷り込みの本体はその提唱者も説明できないのであるが。

そこにアロパシーとホメオパシーの氷炭相容れない思想的本質がある。現代の普通の医師はその薬の成分に固有の効力があると評価するからそれを使う。ホメオパシー医は薬理物質を含まない薬を使う。物質的側面とその薬の別の側面の存在と治療的能力の見解の相違なのであろうか。その別な面とはアロパシー医に言わせれば宗教的信仰と捉えるのであろうか。

ホメオパシー療法が何故効果があるのかを説明する 3 つの仮説を紹介する。

1、大概の患者はいずれ治るものだから効いたように見えるだけで、治療のせいではない。

⁵⁾ 希釈の都度、振盪する方式

- 2, プラシーボ反応を誘発させることによってホメオパシー薬が効く
 - 3, 振盪に確実な根拠があるというホメオパシー側の説明に対して、それを認めるには物理学と化学の基礎理論に大幅な修正が必要になる。
- 大いにホメオパシー側の反発を受けるであろう仮説ではある。

最初に M R A によって脚光をあびるとされるホメオパシーについてと説明をつけたが、ホメオパシー薬の波動測定という方法で謎の一部は解決するであろう。また物理・化学の基礎理論の修正も一緒に行われるであろうと思われるが？

「無限小の法則」に関して水の役割が重要であるのですが、波動にとっても水は情報を伝える物質として最も重要なものである。

水について

水は地球上に存在する物質としては最も身近な物質でありながら最も変わった物質で、その代表的な例が、氷が水に浮かぶということである。この性質は、地球上に何万・何億とある物質の中で水と蒼鉛の合金の一部にしか存在しない非常に珍しいものである。ほとんどの物質は、構成する分子や原子の集合体が気体液体固体となるに従い、より密になるからである。4 の水が一番重いということも特異な性質です。海水の場合、塩分の濃度が高くなればなるほど最大の密度となる温度が低くなり、海水の平均塩分濃度は35%位で、この濃度での最大密度となる温度は約 - 3.54 で、深海の温度はだいたいこのくらいの温度である。

また水の特質のひとつとして、食塩 (NaCl) をナトリウムと塩素に分けるには、ものすごいエネルギーが必要です。このイオン結合を温度や圧力で引き離すには、想像を超える高温・高圧が必要になります。しかし、水の中に食塩を落とすだけで簡単にナトリウムイオンと塩素イオンに分かれてしまいます。この水の性質により、水はすばらしい溶媒として様々な物質を溶かし込み、水の循環とともに運ぶことが可能になります。

例えば、血液を見ても、1ℓの水の中に70~80gの蛋白質を溶かしている。その種類は、各種酵素、免疫に関係する抗体や補体、ヘモグロビン等の輸送蛋白質、酵素、血液凝固に関する因子等、現在わかっているだけで80種類以上あります。同時に、このことから水の存在する場所では様々な化学反応が速やかに起こることが可能であり、このことが水と生命を切り放すことが出来ない大きな理由の一つである。

水は宇宙から飛来する (アイオワ大学物理学教授ルイス・フランク)

N A S A の人工衛星に搭載されたカメラに不思議な黒点を発見し、その原因を調査したところ、小さい家くらいの緩く固まった水と雪のボールでできた小彗星が原因であると結論づけた。

「地球から1500~3000kmのところ、地球の重力によって生ずる潮汐力、または静電気的作用によって、この天体は割れ、太陽熱によって蒸発して気体の塊となっていく。地球から約500kmの範囲に到達するころには、この100吨のほどの水は音速の約20倍のスピードで進み、直径約50kmの希薄な気体のボールとなっているだろう。これはたいした量の水ではなく、ロンドンの霧より希薄な状態だが、それでも十分画像に黒点をつくることはできるだろう。約80kmほどの上空の大気中で、水蒸気の雲のスピードは音速以下に落ちるが、更に落下を続け、高度約55kmの所で大気圏上層の空気と混じり合い、成層圏に循環する風が、水蒸気を氷の結晶に変え、氷の結晶は落下して、低高度に存在する水蒸気の一部となり、最後は雨や雪

となって地上や海に降る」

このように宇宙から水が飛来すると考えている。

記憶する水の波紋

「高度希釈抗IgE抗血清に誘発された人体好塩基球の解粒」という論文が科学雑誌「ネイチャー」に記載され科学界に大論争が起こった。「別紙参照」

この現象が起こるの条件として、希釈液に十分な振動が加わっている必要があるので、生体における情報伝達は、水の分子構造による情報記憶能力が重要であると考えられている。

そこで次に本題の波動について調べてみた

「現象は波動的エネルギーによって表現される」

波動には、一秒間の振動数としての周波数とその一周波の波長とがある。波長はその波動が一秒間に進んだ距離を周波数で割ったものであるから、周波数が多くなれば波長は短くなる。波動性科学では「波長の長さが異なると現象が異なる」事に注意を向けた。

放送用電波 マイクロ波 赤外線 可視光線 紫外線 X線 ガンマ線

これらはいずれも電磁波であるが、波長が短くなるに従って現れる現象が違ふ。可視光線一つを取ってみても赤 橙 黄 緑 青 堇と波長が短くなるに従って色が変化している。

このように現象の変化を波長の変化として捉えたことが波動を考える基本になっている。

次に波形と現象について考えると、いろいろな楽器の八調のドを奏でたとすれば、それらの楽器からでる音波の波長は皆同じである。しかしそれらの楽器の違いははっきりわかる。音色が違ふから楽器の名前を当てることが出来る。音色が違ふのは波形が異なっているからである。

まとめると「現象の変化は波長と波形が異なるから起こるのである」

また、振動数の等しい音叉を同時にたたくと、発生する音は共鳴して一つの音として聞こえる。振動数の僅かに異なる音叉を同時にたたくと、二つの音は唸音を発する。この唸り音は、二つの音叉の周波数の差の周波数の音が形成され、その周波数の少ない音が唸波として聞こえるのである。

これを原子波について考えてみると、素粒子・原子・分子をはじめすべての物質は原子波（重力と同質）を発生している。この原子波が共鳴したとき物質は結晶を作る。すなわち、共鳴したときは、波動はいくつあっても一つの波動を形成する。一つの波動は一つの現象を表す。この作用が結晶という現象を表すことになる。

また、二つの物質の発生する原子波が唸波を構成すると、この二つの物質は化合する。化合したときには、もとの二つの物質はそのまま存在するのであるが、化合して出来た物質は、もとの物質と似ても似つかない形態・性質・機能を現すことになる。これは二つの物質の発生する原子波が唸波を形成するからである。唸波は、もとの波は存在していながら現象としては、もとの波とは波長・波形の異なった波が形成されるので、もとの物質とは異なった形態・性質・機能の物質が誕生する。この考え方は、物質の結晶、化合、生命発生、靈魂形成の理論的基礎

をなすものである。^{*0}

物の形、即ち静態は物質の粒子性によって表現され、物質の形を作る作用は、物質粒子の波動性によるものである。

波動とは

” エネルギーの最小単位 ”

エネルギー＝力であり、引力、火力、水力、動物力、磁力、電力、原子力として働き、これらの最小の単位として「波動」がある。

波動を利用した実験として音叉がよく利用される。また波動を利用したものとしてテレビ・ラジオ、携帯電話・ポケットベルがある。感情も波動である。

今までの科学は物質そのものを対象にしてきたが（特に医学は）、波動は、分子レベルより小さな素粒子レベルの存在によって決定される。原子は原子核とそのまわりを回っている電子で構成されていて、この電子の数や、回転の軌跡によってそれぞれ異なった波動を発生させる。

波動とは

原子レベル以下の固有のエネルギー・パターンである

江本 勝「波動と水と生命と」

波動とは

「直感」や「閃き」。「波動」でもって、それが何らかの形で周波数、波長といったものと同調し、一体化するという形で情報が入ってくる。

周波数・波長・波形・振幅が今の地球の文化では中心となっている。テレビやラジオは「波動」の性質を利用した道具として人間が開発しているものだが、人間の「直感」や「閃き」も実は同様である。人間がそのことに気付いていないだけであるか、または、気付いていても「直感」や「閃き」をそのまま行動に移して実現させるのではなく、それを利害（顕在意識）で修正して具体化してしまっている。人間が何かを考えて行動する、決心をするという時、顕在意識を使っていない時には「直感」「閃き」が起きている。足立育朗「波動の法則」から

周波数変換を行うことによって、違った情報が入ってくる。

具体的に顕在意識が邪魔をしているわけであるから、それを働かせない状態にすればよいわけで、そのひとつの方法として、瞑想がある。

中性子・陽子・電子の形態を直感によって情報を得ると次のような図をスケッチできた。最初に「中性子」としてプログラムして情報を得たものが、で、これは調和のとれたエネルギーを増幅させる図としてプログラムした図と同じ情報であった。つまり、中性子が自然の法則にかなった調和のとれた振動波を生み、それを増幅するという働きをしてくれている。また人間の「意識」とか「意志」というものはどういうものなのか、これについても直感的に発振し、受振して同調するという方法で調べてみると、「意識」は中性子と同じ図が描けてしまう。つまり、中性子は「意識」だったのである。あらゆる物質の元になっているもの、それは原子核であり、その中に中性子と陽子があり、その内の中性子が「意識」

^{*0} 唸波を発生している物質同志が結合して新しい唸波を生じた場合は、さらに複雑な形態・性質・機能をもった物質が誕生する。これを何回も繰り返せば、予想を超えた形態・性質・機能を備えた物体が誕生するであろう。これが生命体の誕生である。物質（粒子性）のみを追っていたのでは、とうてい生命現象を究めることは出来ない。

であるということは、どんなものも全部、「意識」で構成されているということになる。次に陽子について調べると、陽子は「意志」であった。それと同時に自然の法則の「愛」だという情報です。電子の役割は、それを現実化する役割です。

波動とは
「氣」のこと。

波動とは
物質だけでなく、精神も含めたすべての存在を創造するエネルギーの素
「宇宙意識と波動」江本 勝

波動科学の法則

「すべての存在が人間の意識エネルギーによって左右される」

「波動の真理」とは

「波動の真理・・・すべての物や動植物の存在、そして森羅万象の存在は各々の波動エネルギーによって創起される。この波動エネルギーの源は、人間の持つまだ科学的には解明されていない意識エネルギーによるものと考えざるを得ない。したがって、すべての存在は、人間の意識エネルギーによって左右される。」
「波動革命」江本 勝

「波動エネルギーの法則」

『波動エネルギーは常に滔々と流れゆくべきもので、決して澱んではならない。それは、すべての存在の持つ、固有の波動エネルギーの調和と共鳴によって成り立ち、互助共生関係にある。この地球上においては、人間のみがすべての波長を創生し得るので、人間の真の役割は、共鳴の原則に基づき、これらのすべての存在が発する固有の波動エネルギーの調整役でありコンダクターである。したがって、人間の意識自体に偏りや澱みがあるとき、すべての調和も乱れ、いわゆるエネルギーの氾濫を起こすことになり、それは現世上においては、自然災害、経済恐慌、疾病の蔓延という現象を引き起こすこととなる。』
江本

M R A（共鳴磁場分析器）

Magnetic Resonance Analyzer の略

開発者：ロナルド・J・ウェINSTOCK（アメリカ）

ナノメーターの世界で起きいてる現象は今まで考えられていた物質の特性のほか数々の特性を持っていることが解明されてきた。その中の一つに固有振動という物理用語があり次のように説明される

「人間のからだを例にすると、その構成図式は、原子 分子 細胞 組織、諸器官 人間のからだとなるが、原子はその核のまわりを回転する電子の数及び形によって、固有振動を発している。それらの集合体である分子、そして分子の集合体である細胞、さらに細胞の集合体である器官や組織も、したがって固有な振動を持つこととなる。」

ということは、人間の心臓なら心臓、肝臓なら肝臓は本来固有の振動数をもっており、また結論からいえば、世の中のものすべてが各々固有の振動数を持っている。その振動数の違いが物質の形状や特質を決めているのである。すなわち同じ振動数のものは同物質であるといいきれます。

M R A は、物質が持っている固有振動を、4 ないし 5 桁の数字及びアルファベットからなる「コード」を入力することによって、発信する事ができる器械です。ではどうして、いかなる方法で、個々の物質の持つ超微弱な固有振動をコード化

し、それを機器にメモリーさせ、発信させる事ができたのかは、ロナルド・J・ウェINSTOCKに説明をしてほしいのですが、現在のところまだ秘密になっています。

M R A の仕組み

物質や感情が持つ固有振動をノウハウ（未発表）によって探索、検知し、それを4桁から5桁のコードに置き換える。

人間のからだを増幅器として利用するため、その人間が持っている固有振動がテストに影響を与えないようにする。

テストしたい物質を機器の上に置き、調査したいコードを機器に入力する

人間のからだを通じて、テスト物質に対しそのコードの持っている固有振動を送り込む。

もし、その物質が送り込まれた固有振動と同じ、もしくはそれに近い固有振動を持っている場合、それは共鳴現象をおこし、再び人間のからだを通じて、さらに人間という本来最高のコンピューターがもつ増幅機能によって増幅され、共鳴音というサウンド及びその近似の程度を示す数値が得られる事になる。^{*6}

この仕組みはまさに音叉を使った実験と同じ理論である。

M R A の機能

人間の臓器や組織の波動的異常のチェック

健常者の臓器や組織の波動がソフトとしてインプットされ、その共鳴度の近似、あるいは相違により、各機関や組織の波動的異常度を推定する。

バクテリア毒素、真菌毒素、ウイルス毒素のチェック

各毒素の持っている固有振動を中和する固有振動が設定される。

各疾病のチェック

と同様に癌や糖尿病など組織細胞が発信する固有振動を中和する固有振動を設定

その他の毒素のチェック

水銀や鉛、アルミニウムなどの人体にとって有害な毒素波動のチェックが

と同様の方法でできる。

毒素波動や病原菌波動が存在する部位のチェック

により毒素、病原菌波動が存在することが判断された場合、それらと各臓器組織波動との共鳴、非共鳴をチェックすることにより、互いの相関関係を知る。

水質検査

水を機器の上に置き、チェックしたい元素や化学物質のコード、または現物を設定することにより、水の中にそれらの波動が含まれているかどうか、また概数的にその比率も知ることが出来る。

食品チェック

水や食品が波動的にどのような機能をもっているかをチェック。たとえば発ガン性の高い波動を持つもの、あるいはその逆のもの、さらには、ある特殊な疾病の波動に対して、良いか悪いかなど。

^{*6}この数値は2.1を母数とする数字で表わされる

物質と物質の共鳴度チェック

チェックしたい物質のコード、あるいは現物を機器に設定し、共鳴度をチェックする事が出来る。これにより、期待される化学反応が起こるかどうか、危険な取り合わせではないかなどがチェックできる。また物質と人間の共鳴度をチェックすることにより、化粧品、薬品などの人体に与える副作用を予見するデータを得ることができる。

固有振動の転写機能

水や食品、その他必要と思われる物質すべてについて有害波動が検出された場合、その波動を中和する固有振動を転写することができる。これにより、安全な食品や水の提供、あるいは薬品公害等の予防などに利用できる。

固有振動のコピー機能

機器の上部にはAとBの穴があり、Aの固有振動をBにコピーできる。

次にMRAを使った食品波動検査のデータを紹介します

食品の波動測定表

	フレイバー								
(肉類)	牛肉	豚肉	マトン	鳥肉	地鶏	鴨肉	鶏卵	S社	有卵
免疫に対する波動	+17	+9	+10	+8	+18	+18	+9	+16	+12
ストレスに対する波動	+5	-7	+10	-14	+16	+15	-13	+15	+9
抑鬱に対する波動	-12	+7	+10	+6	+9	+12	+3	+16	+12

(魚介類)	アサリ	蛤	サザエ	シジミ	ウニ	タコ	ナマコ	マグロ	ワカメ	ヒジキ
免疫に	+7	+16	+20	+15	+16	+16	+19	+10	+12	+20
ストレスに	+9	+12	+20	+14	+16	+16	+16	+11	+5	+20
抑鬱に	+9	+15	+20	+9	+16	+14	+18	+10	+12	+20

(果物)	リンゴ	イチジク	キウイ	梨	キンカン	巨峰	ミカン	ブルーベリー
免疫に	+14	+19	+18	+14	+19	+18	+11	+20
ストレスに	+14	+20	+19	+14	+19	+19	+14	+18
抑鬱に	+14	+20	+18	+14	+18	+19	+12	+21

(野菜)	ホレン	モロヘイヤ	サトイモ	カブイモ	ニンニク	キャベツ	白菜	セリ	長葱	ミツバ
免疫に	+18	+21	+4	+19	+21	+4	+8	+8	+10	+12
ストレスに	+18	+20	+2	+10	+17	+5	+8	+9	+10	+11
抑鬱に	+18	+18	+3	+3	+8	+5	+7	+12	+9	+12
(野菜)	コマツナ	大根	人参	ゴボウ	レンコン	椎茸	マッシュルーム	舞茸		
免疫に	+16	+15	+14	+13	+18	+10	+21	+21		
ストレスに	+16	+14	+14	+12	+18	+12	+15	+21		
抑鬱に	+15	+15	+16	+15	+20	+11	+16	+16		

(無農薬) 大根 大根葉 人参 キャベツ なす

免疫に +17 +16 +15 +14 +15

(その他)	松茸	ササ-ブ	黒大豆	大豆	瑞雲醤油	有機醤油	塩	瑞雲塩
免疫に	+21	+15	+19	+17	+13	+7	+5	+15
ストレスに	+21	+16	+18	+18	+16	+8	+7	+18
抑鬱に	+21	+14	+19	+15	+15	+7	+3	+18

これらのデータはあくまで測定した時点のその食品のデータであり、すべてこのとおりというわけではないと思う。一生懸命、気を込めて作ったものと、そうでないものとは、明らかに波動は違ってきているし、自然で育ったものと、人工的なものは、やはり波動に優劣の変化がみられるとはっきり証明されている。

病気の本質

人間の「意識」や「意志」というものは、どういうものなのか、これについて直感的に受振すると人間の「意識」が中性子で「意志」が陽子であることがわかったのである。(「波動の法則」で足立氏は、意識と中性子を同じ波動で受振し同じ図を描いた。) その形態が正常であれば、正常な振動波を受振、発振しているはずである。しかし実際は、56億の人の「顕在意識」が歪んだ振動波を出し続けている。歪んだ振動波を出し続けていると、それに近い、周波数の正常な中性子と陽子が、干渉を受けて歪んでいきます。そして今、空気も食物も水も非常に歪んできています。

その結果、それを吸収している人間も、その体の細胞のうちの原子核の中の中性子・陽子・電子が歪んできている。人間の体の中性子は平均して85%、陽子は5%、電子は90%以上も歪んできている。これは自分自身の顕在意識が中性子・陽子の歪んだ振動波を発振し続け、自分が歪んだ振動波を発振すれば、自分の体の細胞も全部干渉を受けてしまいます。あるいは同調して増幅してしまっている。ウイルスや病原菌というのは、正常な中性子・陽子・電子で出来ているものが、何らかの形で歪んで結びついて出来ている原子や、それで構成されている分子なのである。病原菌の場合は基本的には分子レベルの歪みで、ウイルスは原子核および原子レベルの歪みである。陽子が歪みだしてから、ヘルペスウイルスとか癌ウイルスとかエイズウイルスなどが生まれたのです。

自然の法則は常に調和のとれた中性子・陽子・電子を生み出している。基本的に「闘う」「殺す」という「意識」は、自然の法則に反している。薬というのは、殺す、破壊するという形で自然の法則に反しながら、中性子・陽子・電子を更に歪めている。病気の理解も現象に基づいていますから、要するにその性質がなくなれば、病気や病原菌がなくなるという解釈です。いまの治療は病原菌を憎んで殺して殺菌する薬が良いものだとし、競って開発するわけです。これでは病原菌の数が増えるのは当たり前です。種類の違う歪んだ振動波をまた作り出して捨てるわけですから、新しい病原菌が生まれるのは当然です。また新しい薬を開発するということは、歪んだ振動波の組み合わせを増やすわけですから、また新しい病原菌が生まれます。ですから今のままでいけば、エイズの段階で終わるはずはないのである。

今大事なことは「顕在意識」*0が自然の法則にかなった調和のとれた方向に意識変換をするということで、そういう「決心」をしたら、それを実行することです。そうすると周波数は変わります。「決心」したことを実行し自分自身の調和、つまり調和のとれた振動数を出すということが大切です。自分が良くなると、周りに常にすばらしい振動波を発振・受振するという事を起こす。すると周りがすべて良くなってきます。

脾臓と膵臓の働き（波動の法則から）

人間の身体のエネルギーを維持・管理・運営するために、食べている食物で補給している量だけでは、精巧な人間が機能することは不可能です。宇宙からもっと調和のとれたエネルギーが直接入ってきている。その入ってきている場所のメインの部分が脾臓で、虫垂と盲腸にもすこし入ってきている。また膵臓は潜在意識が存在している。

余談

「本質」とは

「意識」と「意志」の集合体である

そして「意識」と「意志」には三種類あって、一番ホログラムに使われているのが顕在意識です。今この地球文化というのは、顕在意識が基本になっている。すべてにおいて最終的に一番大事な役割をしているのが顕在意識であるという前提で、この五千年くらいの間の文化は、ほとんど進んできてしまっている。

二番目は心理学用語でいう潜在意識（FIK）に近い状態のものです。顕在意識は現実に自分のボディ、人間の体を一人一人が安全にまもって維持、管理、運営するのが基本的な仕事ですが、潜在意識のメインの仕事は過去の情報を制御することです。潜在意識は、過去の情報を集めて、それらが記憶された装置でコントロールし人間の顕在意識が行っていないほとんどすべての部分を受け持っています。潜在意識が存在している場所は、臓器でいうと「膵臓」で、膵臓が潜在意識の振動波を受振、発振している。潜在意識は、身体中の細胞が入れ替わっても間違いなく、目は目、鼻は鼻に責任をもってコントロールしてくれているわけです。すべてが予定通り、再生されている。そのコントロールに顕在意識は全く関与せず、潜在意識の方で担ってくれているわけであります。

三番目の「意識」と「意志」は、「本質的なもの」という言い方が出来る。

これは電子を持っていないのです。意識（中性子）と意志（陽子）は、これに電子を伴って原子化するわけで、顕在意識と潜在意識は肉体の一部になっています。三番目の「意識」と「意志」の中性子と陽子は、回転運動をせず電子を伴っていない状態の原子核だけが回転運動をしてたくさん集まって構成している状態です。これが「本質」であり「原子核の集合体」であり日本語では「魂」という言い方が、不正確ではあるが一番近いかも知れません。

最後に自然の法則にかなって調和のとれた方向に「意識」を変換するための日常生活の方法を紹介します。

直感を得たら即実行すること。そしてそれを繰り返すこと。これはものすごく大切なことで、直感が働いているときは、必ず顕在意識が調和がとれて原子核の集合体（魂）と同調しているわけでそれを繰り返し使えばそれだけ調和のとれ

*0ものを考えたり、行動をとったり、決心をしたりする働きをするもの。実際に、生まれたときから、自分で行動をとっているものになっている考え方は、主に顕在意識が役割を担っている。

た時間が長くなりだんだん高い周波数で安定してくることになる。ストレートに「顕在意識」が素直に実行するという方向で「決心」をして行動をとることが基本です。その直感を実行すると確認できる。そして「この感じ方の直感」というものがわかってきます。直感の中に間違えることがあるというのは「直感」と思っているけれど、実際には自分の「顕在意識」での希望的観測を「直感」と自分で思ってしまったからです。「損得」で「直感」が働くことはなく、「これは自分は自分のことだけ考えて、自分だけがメリットがあるからやろうとしているのか」というチェックがいつも必要です。正確な直感を得るためには、常に出来る限り自分自身がすべてに対して謙虚であること、つまり、自我の振動波が限りなく少なくなるように心がけることが肝要だということです。

学生時代物理学のおもしろさを見つけだせなかった私が、現在夢中になれる物理学に出会った。目に見えないエネルギーが目に見えるエネルギーとして誰にでも簡単に（多少の技術も必要である）確認できるようになった。氣、氣功、超能力とよばれるものからDNAの書き換えや魂までも説明のつくものが波動理論である。

「それを作れば、彼は来る・・・」

「それを作れば、彼は来る・・・」

「それを作れば、彼は来る・・・」

「声」はその主人公にしか聞こえなかった。その「声」に導かれ、破産を省みず、自分のとうもろこし畑を野球場に変えた。そこにアメリカ大リーグ時代、不遇をかこって他界した、かつての名プレイヤー達が集まって練習を始めた。練習が終わり彼らは主人公にこう尋ねる。「ここは天国か？」と。

やがて彼もやってきて、主人公と対面し、キャッチボールをする。父子の出会いである。そして家族を紹介する。私自身も、もしも願いが叶うならと思う場面であり、目頭が熱くなる。やがてラストシーン、夕闇迫る野球場に、波長をキャッチした人たちの自動車のヘッドライトが延々と続く。

この映画も波動の映画なのである。意識や意思と呼ばれるもののエネルギーが波動として伝わるが誰でもそれを受け入れられるのではなく、その波動に共鳴できる人にしか、音も姿もわからないのである。その大リーガー達の姿を見られる人間は、熱い想いと、純粹無垢で、無欲なものたちなのである。

また甲田光雄先生は患者への講話の中で次のように語っています。

「あなた方が、自分の運命を変えようと思えば、想念が決定的になります。あなた方の現在の運命は、あなた方の過去の想念の現れです。結局、人間というものは、考えているとおりの人間になるものです。アメリカのエマーソンが言っています。『あなたが今どんなことを考えているかによって、あなたの運命が決まってくる。』したがって、いかに思い、いかに想念を正しくするかが問題となります」と。

波動というものは、どのようにも変えることができるものです。

「おもしろき事もなき世をおもしろく、すみなすものは心なりけり」と高杉晋作が詠んでおりますが、気持ち一つでということがすべてのような気がします。

そして私自身はもう少し波動を勉強するつもりです。

参考文献

- 「新波動性科学入門」 大橋正雄
「波動の法則」 足立育朗
「マインドパワー」 ジョン・デビッドソン
「波動の人間学」 江本勝
「波動の真理」 江本勝
「波動革命」 江本勝
「波動と水と生命と」 江本勝
「宇宙意識と波動」 元バートラ&江本勝
「波動の食品学」 菅原明子&江本勝
「人は何故治るのか？」 アント・ルー・ワイル
「癒す心、治す力」 アント・ルー・ワイル

コフィサービス朝日新聞社データベース

江本 勝著書の目次一覧

水の波動が汚染されている
湾岸戦争に於ける爆弾の波動は瞬時にして全世界を波動的に汚染した
ストレスは免疫機能の敵
ストレスは歴史を持つ
電磁波波動のよる汚染
アレルギーはミネラル不足を警告している
水は物質と波動を結ぶ
すべての事象は波動から
人体はコンピューターと同じ
人体を構成する層、十二層論
色は波動そのものである
人間に緑が必要な理由
108の煩悩と元素の関係
恨みと感謝は同じ波形
エーテルとはH₂Oのことなりという仮説

(『波動時代の序幕』サンポート出版)

波動とはエネルギーの最小単位である
人間とは超精密なロボットである
元素のアンバランスが病気や老化の原因
元素のバランスの崩れ、即ち煩悩
失われつつある人間の波動的臭覚
遺伝子を波動として捉える
ドレミファソラシドの科学
雲消しゲーム(誰でも雲を消すことができる)
クオークとは意識のことなり
小さいことはよいことだ
波動教育こそ人類を救う

(『波動の人間学』ビジネス社刊)

言葉は波動なり

真理と真実と半導体の関係
宇宙との交信はあり得る。だが、その相手が問題だ
微生物 = 自分である
虚と実の関係が分かりかけてきた
江本式波動チャートの発表
陰陽論は絶対的なものか？
陰陽論からの脱皮
遺伝子は先祖の教育波動である
水のあるところ必ず波動がある
不思議な水の特性の解明
地球の水は宇宙の果てから飛来した
私達は、宇宙の流人の子孫か？
波動を具現化（映像化）することに成功した
水の氷の結晶

（『波動の真理』P H P 研究所刊）

「超ひも理論」は究極の波動理論である
水が情報を記憶する
タンパク質は波動と細胞を結ぶ半導体である
近未来、水が薬になる時代がくる
化学変化は、原子間の波動共鳴によって起こる
温度は波動である
水は歴史を記憶している
氷の結晶は鋳型であり、その形によって情報が異なる

（『波動と水と生命と』P H P 研究所刊）

すべて虚から始まる
人間も10の 10^{23} 乗秒毎に点滅している
食とは波動なり
良い音楽は免疫力を高める
人の想念は宇宙まで届く
免疫とは愛のことなり

（『波動の食品学』高輪出版社刊）

「波動エネルギーの法則」への道
五大洲と五臓の関係
ハイポニカ農法は波動技術そのものであった
写真でも波動測定はできる
経済も波動の現象だ
生命現象を波動的に見る
水と油が交わらない理由
人の意識はエネルギーの根源だ
人の意識のできることを映像で捉えた

（『波動革命』P H P 研究所刊）

波動研究の足跡
物と心の共存
波動の幸福論

環境問題は波動技術で対処できる
高齢化社会にどう対処するか
波動の宗教学
これからの教育と波動
ある中学理科教師の波動教育

(『波動の幸福論』P H P 研究所刊)

予防医学の必要性

「現代において我々は、人類が今まで経験もしてこなかったいろいろな慢性疾患に、世界的規模で直面している。最近の様々な研究機関の報告によれば、環境汚染や情緒的なストレスがその要因をなしているとされている。そしていろいろな毒素が、我々の住む大気に、水に、そして食べ物に確実に入り込んできており、また、ラジオやマイクロウエーブなどから発せられる様々な周波数が、毎日のように私たちの生活圏の中に攻撃をしかけてきている。

ホメオパシー（同種療法）の分野においては、これらの毒素要因を中和することがかなりの確率でできるが、それでも大きな問題は残る。それは『時』という問題である。ホメオパシーは病気の始まる時に最も有効である。したがって、医学的問題の所見が早ければ早いほどホメオパシーを用いての治療率も高いものとなる。しかし残念ながら、ほとんどの医学的チェックは、生化学的もしくは病理学的見地に依存しているもので、治療が行われるころには、病気そのものがどんどん進行してしまっている。したがって、有効な治療効果を高めるためのキーは、前生化学的、あるいは前病理学的なチェックシステムの確立にある。」

気の医学会から 1996.2.18 東京女子医科大学に於いて

「空間医学（場の医学）への提唱」 帯津 良一

医学は今や大きな転換期を迎えようとしている。

臓器の医学から場の医学への転換である。臓器の医学として一大体系医学を築き上げた近代西洋医学が免疫学に到達して、場を垣間見はじめているし、最近話題の波動の医学もその現れの一つだろう。近代西洋医学の支柱を為してきた物理学が古典場から量子場へと進みながら、場の科学としての本質を明らかにしていることを思えば当然の帰結である。

一方、非科学的であるとの謗りを受けながらも、もともと場を対象としてきた東洋の伝統医学にも多くの関心が集まり、現代科学の介入によって、化学的に体系化されていくことだろう。

さらに、場が脳を通して外に現れたものを心と考えるならば、精神神経免疫学などの心の医学も場の医学である。

場の医学の到来は近い。

そのことを予測しつつ、ホリスティックなアプローチによるがん治療を行ってきた現場から、場の医学の臨床を中心に、その展望について述べてみたい。

- 1 , 治療する側と治療される側、その家族・友人との場の交流を考える。
- 2 , 患者、医療従事者というような、それぞれの職の差別をしない。
- 3 , 理解を得るために本人・従業員にも同じ事を体験させる。
- 4 , 自分の場を高めること。

- 5 , 死をぬけて、向こう側までも突き抜けるほどの希望を持つ、持たせること。
- 6 , 希望はあなたの心にあり、生命はあなたの足下にある。
- 7 , 死の意味を考える。死後も医療の対象である。(死ぬ手前で医師の役割は終わったと思っているのが現実)
- 8 , 二人の共有の場を高める努力。
- 9 , 地球は創生期よりポテンシャルが落ちて折り返し点を迎えている。ポテンシャルを高めて復路の旅をするために人間はガソリンを供給している。それが人間が生きている意味である。
- 10 , 手術は空間を手の内に入れる事である。臓器の空間を見つめることである。
- 11 , 自然治癒力 - - - 邪魔をしなければ秩序性の高い方へ(すべて高める方向に)むかってゆく。
- 12 , 証 - - - 場のベクトルの歪み
場のつながりがある治療法を考える(食事・身土不二・全体食・漢方薬)

代替医学 - - - 西洋医学 - - - 東洋医学

気功 - - - - - 食事

こ - - - - - こ - - - - - ろ(心)

一番の土台は心である。

気の本体と気の記憶 北里大学医学部分子生物学 中村國衛

従来「気」は捕らえどころのない漠然としたものと考えられてきた。その最大の理由は、「気」を客観的、数量的に測定し、その消長を論じることが出来なかったこと。Quantum Resonance Spectrometer (QRS)をはじめとしたSubtle Energy Analyzing Device が制作され、生体微弱磁気(μ gauss ~ m gaussの微弱の磁束)が捕らえられるようになり、不可能と思われてきた「気」も、Subtle Energyの一種として定量化が可能であることが解ってきた。磁気には電流に伴って生じる「横波の磁気」と素粒子群(Fundam)の共鳴状態において生じる「縦波の磁気」とが存在すると言われている。

「縦波の磁気」はエントロピー収斂型のゼロベクトル・エネルギーであるために通常の横波用磁気センサーでは測定不可能である。一方、酸素及び微量金属を含有するミネラル・ウォーターは磁気記憶素子としての役割を持つことも解ってきた。即ち、ミネラル・ウォーターに磁気を掛け、記憶されている磁気情報をQRSで解析すると、記憶されている磁気の詳細が解読されるという事実によって、強い「気」を発する人に依頼し、磁氣的に中性なミネラル・ウォーターを含むプラスチックボトルに向かって、気を掛けてもらい、水が記憶する情報を解析した。QRSが内蔵する印・消磁装置を操作し、記憶された「気」の性質を解析したところ、「気」のEnergyは、横波の磁気とは異なり、一旦記憶されると機械的に消去不可能であることが判明した。即ち、気の本態は縦波の磁気: Fundam energyであると結論され、水により強固に記憶されることが判明した。

Fundam energyの種類は 10^{46} 種類ある。

自然の实在に関し、意識の役割を評価するため、意識が物質の法則の中でも最も根源的な量子のランダム性に従うか否かを判定する厳密な検証実験を行った。ランダム性の検定は、ネオンガスの気体放電時の電子遷移に基づく一つ一つの発光のタイミングを光電子増倍管でとらえ、ランダムパルス列を取り出し、これを水晶発振器から出力される正確な50% - 50%のデューティサイクル比（確率1/2）の信号とともに、AND回路に同時に入力する装置で行った。出力パルス数はその半分で、平均2000を中心に標準偏差が31.6227となる正規分布を描く。実際無人の部屋で4000回の独立試行を6300回繰り返して測定した結果、平均2000.59、標準偏差は31.703と極めて理論値に近い正規分布をとった。

ところが人と人とが装置の近くで自由に対話し、自然な意識・心の変化を装置のそばで醸し出すようにすると、意識の突然の変化に対応して電子遷移の偶然性が大きく統計予言値からずれる現象を高い頻度で確認した。すなわち装置の傍らで人が驚いたときや、何かに気がついて意識が突然動いた時、あるいは気功能力者などが介在し、気功療法を施行したときには、測定値はこの無人の場合の確率分布から極めて大きくくずれた。（確率にして1万～1兆分の1以下）

この現象の示す意味は、意識が水晶発振器のクロック信号に対して、電子遷移が何時起きるかを予知したり、あるいは有意なタイミングで電子遷移が起きるように制御していることを示唆している。

現代科学は、現代物理学の基本である量子の偶然性に依存している。「何人といえど、いつ電子遷移が起きるかを予知することは出来ず、またこれを制御することもできない」というのが物質世界の深遠な原理となっている。したがって量子の偶然性は物質世界の最も根底の原理である。

生命科学や神経生理学も物質物理を規範とする現代科学である以上、物質世界の基本である量子の偶然性を侵犯する概念は伝統的に許されず、したがって意識も心も脳の高度な物質的機能の結果だととられている。しかしながら意識が物質世界の最も根底の原理である量子偶然性でさえも制御できるならば、意識がもはや脳の物質的機能の結果にすぎないと考えすることは出来ない。なぜなら物質世界の根底の原理が、脳の物質的機能の結果にすぎない意識によって、さらに制御されるはずはないからである。すなわち量子偶然性を制御する意識の方が、量子偶然性を根幹とする（通常の）物質世界より、明らかに深い存在であり、意識はプランクの定数でしきられる電磁相互作用の認知体系を遥かに超えた存在であると思われる。

電子遷移は水を含む生体構成物質の化学反応の基礎となる量子現象である。この現象が意識により干渉されることは、もはや生命はその物質的基礎以上のものと判断できる。

我々は量子確率過程への意識の干渉効果を通して、意識は物質世界よりもさらに深い实在であると考えている。